

② ビハーラ活動30年の歴史

宗派では、1986（昭和61）年に「ビハーラ（仏教ホスピス）研究会」を発足させ、ビハーラ活動を実践する準備が始まりました。翌年の1987（昭和62）年に基本学習会をスタートさせました。その養成研修会も30年以上続いており、その修了者たちは、第26期修了時点で総計1,287名となり、各教区や施設・病院などの拠点でともに活動しているビハーラ活動者は、教区への調査によると現在は、2,580名となっています。

私たち念仏者の生きる姿勢は、かけがえのないいのちの尊厳にめざめ、御同朋の社会をめざして生きるところにあります。人の一生は、生苦・老苦・病苦・死苦を逃れることができません。それらの苦悩する人々に寄り添う具体的活動として、「ビハーラ活動」に取り組んできました。ビハーラ活動は、人の不安に共感し、苦悩を和らげる全人的な支援ケアをしてきたといえます。

ここで過去の30年の歩みを大枠であらわしますと、次の年表を参考にして区分できることでしょう。

- ①ビハーラ創造の時代 （1986年－1989年）
- ②ビハーラ教区展開の時代（1990年－2000年）
- ③ビハーラ見直しの時代 （2001年－2008年）
- ④ビハーラ探索の時代 （2009年－2018年）

①ビハーラ創造の時代（1986年－1989年）

宗派では、1986（昭和61）年に、「医療と宗教に関する専門委員会」を創設し、その研究結果を「医療と宗教」（1989年3月発行 編集：教学本部 発行：本願寺出版部〔呼称は当時のもの〕）という一冊にまとめています。同時に、宗派の宗務所において研修部所管のもと「ビハーラ（仏教ホスピス）研究会」を設置しました。しかし、研究だけでは具体的かつ迅速に研修等の実践態勢に入ることができないという事から、「ビハーラ実践活動研究会」と名称を改めました。

さらに、より具体的な細部の研修プランやカリキュラム、そしてその指導體制を確立する必要があることから、「ビハーラ実践活動専門委員会」を設置しました。

ビハーラの基本構想やカリキュラムができると、「本願寺新報」などを通じて「第1期基本学習会」の受講者募集に入りました。2年間の研修が終わると、組織的に教区でビハーラ活動の実践が始まり、福井教区と大阪教区においてビハーラ組織が結成されました。

このビハーラ活動の創生期には、新聞は論説・論評・ニュースなどに取り上げ、各TV局も積極的な取材を行い、広く報道されました。

②ビハーラ教区展開の時代（1990年－2000年）

1990（平成2）年までには6教区でビハーラ団体が設立され、活動が組織的に展開されていましたが、1990（平成2）年度の一年間で、5教区においてビハーラ組織が立ちあげられました。それは、ビハーラ基本学習会の修了者が教区ごとに集まり、ビハーラ活動の実践場所を交渉し、組織的に活動したことによります。それは、修了時にあたって強く組織化の要請をしたことの結果でもありました。

宗派では、ビハーラ活動者を養成する担当部署を当初、研修部所管で行っていましたが、「基本学習会」を修了し、ビハーラ活動を行う者については、社会部が所管することとなっていました。1992（平成4）年には養成も活動もという思いから、ビハーラ全業務の所管が社会部に一本化されました。1994（平成6）年には、本願寺を主会場にして、「第1回ビハーラ活動全国集会」が開催されました。2018（平成30）年には、「第16回ビハーラ活動全国集会・30周年記念大会」が行われています。

③ビハーラ見直しの時代（2001年—2008年）

2000（平成12）年3月にビハーラ活動の方向性が改訂され、それまでの「広く社会の中でのいのちを見つめるビハーラ」「いつでも誰でも実践できるビハーラ」「相手の望みに応えるビハーラ」「医療・福祉と共にあるビハーラ」から「広く社会の苦悩にかかわるビハーラ」「自発的にかかわるビハーラ」「相手の心に聴くビハーラ」「医療・福祉と共にあるビハーラ」「深いいのちを見つめるビハーラ」の5つの方向性について実践していった時代です。

「ビハーラ活動者養成研修カリキュラム」についても過去の点検・反省の上に立って改正した新しい理念の徹底と、よりカウンセリングの理論習得と実践実習を強化するため、2005（平成17）年には大幅なカリキュラムの改定をしました。

また宗門全体でも親鸞聖人750回大遠忌法要を迎えるにあたって、その活動のさらなる充実を図るうえで、研修並びに実習可能な宗派独自の施設設置が求められるなか、宗門長期振興計画推進協議会において審議がなされ、その結果、2008（平成20）年4月1日には「特別養護老人ホームビハーラ本願寺」と「有床診療所あそか第2診療所（あそかビハーラクリニック）」が京都府城陽市に開所されました。

④ビハーラ探索の時代（2009年—2018年）

この10年はビハーラ活動が様々な形で探索した時代だったといえます。

ビハーラは元々、田宮仁氏によって仏教ホスピスに代えて用いたことがその始まりですが、浄土真宗本願寺派では高齢者施設においても積極的に活動してきました。これは浄土真宗の救いが臨終の場面のみ注目することではないことから、より活動現場を広げてきたといえるでしょう。

この10年では、より一層、緩和ケア病棟や高齢者施設におけるビハーラ実践を深め、検討されていきました。2014（平成26）年には「あそかビハーラクリニック」が国からの認可を受け、病院化され、独立型緩和ケア病棟「あそかビハーラ病院」として新たに開院し、実際の緩和ケアの現場で、僧侶がどのように実践していけばいいのかを探索しました。また、2017（平成29）年度には、ビハーラ僧養成研修会（仮称）【試行】が開催され、より専門的なビハーラ活動についても探索しました。

さらに、寺院におけるビハーラ、子どものケアや災害復興支援としてのビハーラなど、様々な活動の可能性を探索した時代といえます。結果、仏教者・宗教者としての実践、専門家（職業）としての実践、ボランティアとしての実践、僧侶・門信徒としての実践等々、活動者の立場の違いもあり、仏教を基礎としたターミナルケアの領域、高齢者福祉領域、寺院・地域領域、児童領域など活動領域の違いによる多様性もあり、様々な活動が展開していきました。一方で、それぞれの領域ごとにおいてどのように活動すればいいのか、という新たな課題も出てきています。